
我が妹の危険性レポート

ぴーせる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が妹の危険性レポート

【Zコード】

N2178M

【作者名】

ひーせる

【あらすじ】

今回、俺が書き記すこのレポートで、我が妹、真琴の危険性との美貌を存分に紹介していくと思つ。

(前書き)

作品完成日：2006/10/24

ええと、何から書いていけばいいだろうか。

真琴が初めてお兄ちゃんだと呼んでくれたときのことへ

真琴の初めての反抗期のときのことへ

真琴が照れ^{テレカ}り^{テレ}に变成了^{テレ}ったときのことへ

いや…… どれも普通に可愛すぎで話にならん。

ダメだな。

いへ、 もうと真琴の危険性を伝えられるような

あ。

あれなんかいいかも。

*

「誕生日だね」

真琴が突然に言った。

俺が珍しく机に向かってこることの「ことである。

普段学校以外では開けることのないカバンからノートを取り出して、今まさに勉強という名のどちらくしょー悪魔と大激闘してやるとしているが、その激しく火花を散らせまくつてもしゃこれが引火の原因になるのではないかといつほどの白熱しようとするノートと俺の間に覗き込むようにして、真琴の顔がひょっこりと現れた。

つまり宿題をしようとこらへに真琴登場。

やうこいつことだ。

わおびっくりだと、そんなんはどうでもいい。

(誕生日?)

今日、誰かの誕生日だけ?

俺の記憶上、今日とこいつ日に産声を上げたベイビーな野郎は、少なくとも俺の周りじゃ一人しかいない気がするのだが。

聞くと、

「やだなあ、お兄ちゃんのだよ。今日はベックレスやうから楽しみにしてね」

その可愛らしい顔をにんまりと笑顔に変えながら言った。

とつあえず思つのが、真琴可愛い。

違うか。

そして一度の思考停止。

再起動。

ええと……普通、今からビックリさせてやるつとする誕生日の本人に

「誕生日だね」

とか言つものなのか？

「ビックリさせちゃうから」

とか言つものなのか？

大胆不敵な可愛すぎて世界が滅んでもおかしくないような笑みを浮かべるのか？

俺が思つていたデフォルトのサプライズ誕生日といつたら、誕生日のことに触れないようにして本人にサプライズをプレゼントするものだと思つ。

例えば俺が

「今日つて俺の誕生日だよね？」

と聞いたら無視をして、そのせいで落ち込んでる俺に思いつきりクラッカーの嵐を浴びせてサプライズ。

たしかこんなものがサプライズ誕生日の定番だった気がするんだが。

まあ真琴らしさいつしかららしいズレ方だわ。

らしくても困るんだが。

「それでね、」

そのぐるんとせせらぎ緩いペースを当てたよつた栗色の髪を揺り、
真琴がふるんとした唇を動かす。

「ケーキ作るから一緒に作る?」

口に入差し指を当てて言ひ。

可愛い。

論点違つか。

また思考停止。

再起動。

ふざけてる。

絶対真琴はふざけてる。

どこの家庭に誕生日の本人にケーキを作らせるふざけた風習があるところのだろうか。

たぶんこれを見琴に言つたら

「うーん……」

と聞こえうなので言わなこでおく。

はあ……。

真琴は妙に天然だから困る。

まあ可愛いからオールオーケーなのだが。

よく分からんが、自分の誕生日ケーキを作る野郎と言つたら、独身の寂しい野郎かまたは単にケーキを作るのが好きな野郎だけだろう。

俺、どっちにも当てはまつてねえ……。

真琴恐るべし。

「あ、作りに行こひつ」

真琴はそう言つて、俺が浴室で宿題をしようとしているにも関わらず、腕を掴んで俺を引きずつていった。

するするするするする。

これ、宿題出来なかつた理由になるのかな……？

*

「卵にグラニュー糖、薄力粉……あとバターだつたつけ？」

俺に聞くなと言つた。

激しくやう訴えたい。

真琴が言つては、「俺をびつべつせねへり」の薄シートを作りし。

「うしごうくつわんじをすこべりがびつべりだ。

キヤミンールの上に母さんから勝手に借りたエプロンをしてコシクさん氣取りの真琴。

「うで買つたのか、あの白くて長い立派なコック帽まで着けてる。

妙に誇らしげな顔をしてはいるが、そういう顔はケーキを作り終えてからして欲しいものだ。

「じゃあ……真琴、こつあまーすー。」

「うへへへんだお前は。

キヤミンールのため腕まくつする必要性など塵たりともないに關

わらす、それでも格好つけるためか腕まくりの真似事だけをする。

突っ込むべきことだとひしひしと肌に感じてはいるんだが、そのままやる気満々の顔といつたら……。

もつね、兄としてはなんとも言えないわけですよ。

だから生暖かく見守る俺。

その間に卵を手に取り、それを机の角にぶつける真剣。

そう、威勢よく。

問題なく砕けた。

「お、お兄ちゃん……えぐい」

「わ、分かった。卵は俺が割つてやるから泣くな！ 大丈夫、卵にヒビを入れようとしてそのままぐりやりと叩き割る」とぐらりよくあるわー！」

「ふええ……」

なんでこいつは卵叩き潰したくないで泣くかな……。

しかもガチ。

気遣つのはいいやなんだぞ。

まあ可愛いからお兄ちゃん頑張つかやうけど。

建前仕方なしに本心『レーレ』に真琴が割つた卵を台拭きで拭き取つてやり、まだ真琴が持つていた残りの卵を取り上げた。

割つてやるとか言つてしまつたが、俺は料理経験がない。

作ったことがあるのはカツプ麵くらいなもの。

そんな俺がケーキを作?

ハハツワロス。

俺は真琴の一の舞にならないように慎重に卵をキッチンの角に軽くぶつける。

小気味のいい衝突音と、割れる音。

そこに出来たヒビに指を突っ込んで真つ一つになると中身がとう一つと出てきた。

意外と簡単かも。

と思つたのはつかの間。

油断した隙に殻の欠片が中身と一緒にボールイン。

ものの見事に吸い込まれていつてしまつた。

殻入り卵の完成！

つて訳にもいかんか。

「ありやりや……」

真琴、お前が言つな。

はあ、めんべくせえ。

今度はボールの中に手を入れて、その入ってしまった欠片を取り除く。

一個、二個。

順調にいったのはそこまで。

三個目。

何をどう違えたか知らん。

でも黄身が割れた。

うわ、と思いながらなんとかその黄身まみれの中から最後の一欠けらを見つけ出す。

捨い、ゴミ箱に捨てた。

が、まだ指にとどけたとした黄身がへばついている。

「え、なんか気持ち悪い……。

そう思って手を洗おうとするとい

「お兄ちゃん」

真琴が、

「はむっ」

指を咥えてきやがった。

ペロペロと指を舐めてくる。

しかも、ちよっと頬を緩めながら。

……〇へ。

……落ち着け。

クールになるんだ俺。

とりあえず深呼吸。

はい、吸って、吸って……

吸つて、吸つてえ、すつ……すつ……

げほつげほつ！

む、無理っ！

このベタなギャグの深呼吸は無理っ！

ならしなきやいいじゃんとかいつ突つ込みは門前払い。

おい真琴。

はむつ、はねーよ。

あつちやいけねえぞ？

分かるか真琴。

お前は何がしたいんだ？

もしかして豚肉をひもでしばつて燻製にすると美味しいあれのこと
を言いたいのか？

それともとつとじして尻尾の短いネズミのことを言いたいのか？
考えている間にも俺の指を咥えながらペロペロと舐めてきてくる。

なので、その咥えられた指を奥に突っ込んでみた。

見事にむせ返った真琴。

「何するの、お兄ちゃんつーーー。」

涙目になつてこる真琴。

むしろその言葉は俺が声を特大にして叫びたいのだが。

まあ特大にして叫ぶと」近所さんに迷惑がかかることは重々承知なので普通に、

「お前は何がしたいんだ?」

ん~とね~。

可愛らしく小首を傾げながら真琴は言ひ。

「黄身が勿体なかつたから?」

卵をこぼした真琴が一番いついやいけない言葉を。

しかも何故疑問系?

ブームなの?

ねえブームなの?

「それにおこしこよつ

えつへんと胸を張る真琴。

でも張るそれは薄い。

本当に前は何がしたいんだ?

勿体なくてうまいないうちにあぶらまけた卵も這いつばりながら
ペロペロ舐めとけよ。

試してそのことを言つてみると、

「ダメだよ、汚いもん」

出来ればその常識を兄にも向けて欲しいものだ。

もつとも、それは十年かけてようやく達成できる感じのことであり
ゆづことは知っている。

だから俺は特に突っ込みもせず、何故か真琴が手渡してきた料理
本を見ながらケーキを作り始めた。

まあ、焦がしたのは言つまでもない。

*

「いっただきま～すっ！」

俺の隣の席に着きながら、律儀にも両手をしつかり合せていつま
真琴。

なにをどう行動を間違えたか、頬に生クリームなんて付けたりやつて。

そりやあもう可愛いやつたらあつやしない。

「うらやまいただきたいへんこだ。」

もふもふと焦がしてある」と無頓着であるかのよつにケーキを頬張る真琴。

素晴らしへおこしそうに表情を緩めた真琴が、気が付いたのよつに「あ」っと嘆いて俺を見てきた。

むしかしてやつと焦げてゐると気が付いたのか?

ナツ思つたが、様子から見て違つよ。

「ねえねえお兄ちゃん?」

「どうした? おかわりならいいでも食えよ。俺はひとかけらたりとも食いたくない」

特にこの焦げてクソまずいケーキなんぞ。

「違うよお~」

顔に「そこまで食いしん坊じゃないよ~」と油性マジックで書いたような顔をしながら真琴は首をふるふると振った。

黄身まで舐めてる時点でその汚ねえンキでお前の顔に書かれて

るがな。

「お兄ちゃん、裸エプロンって好き?」

ずつこけた。

そりゃあもう吉本新喜劇の如く盛大にすつてんじうりんと。
どこのどいやつて足を滑らせたんだか自分でも分からない。

「な、何だつて!?」

「だから、裸エプロンだよ。お兄ちゃん知ってるでしょ?」

そりゃあ知ってるともさ。

裸エプロン

それは、男のロマン。

全裸状態でつけるエプロン。

唯一の着衣。

それが体を動かすたびにチラチラと要所が見え隠れするチラリズム。

あ、今見えた!

も、 もひゅい…… ハプロン邪魔！

くわつ、 め、 田のやり場が…… ！

どれをとつても素晴らしい。

これにぐつといなこやつは男じゃない。

男として認めない。

また全裸の代わりにパンツ一丁で着るタイプもなかなか乙なものがあるのだが、 それは置いておこう。

「あ、 ああ……」

イマイチ言葉の意味が読み取れないでの、 暫昧に頷いてみせる。

真琴は「う」ココと笑った。

「お兄ちゃんのために裸エプロンになつてあげようかなつて思つた
だけだ」

「ていつ」

「痛つ」

とりあえず期待に胸を膨らませた感満々のキラキラした瞳を携えたその額にチョップを喰らわしておいた。

かなり軽くやつたはずなのに、それでも痛そうに額をさすっている真琴に追撃の手を繰りだるうかと思つたりしたが、見てる分には可愛かつたりするのでやめておいた。

「痛いよお、お兄ちゃん……」

「へと睡きながら上田遣いに俺を見てくるあたりからして、こいつは無自覚型凶殺人兵器と見える。」

誕生日のお祝いに、裸エプロンになつてあざる~。

ああ。

そんなの、嬉しそうなプレゼントじゃないか。

……いや、嘘うそわれるつもりはないが毛頭もないが。

うん。

可愛くて男心鷲掴みなプレゼントだけれども、そんなことはいかん。

「お前な」

ぱんつと真琴の頭に手を乗せながら言ひ。

「もつと体を大事にしろよ」

「健康だよ～」

意味を完全にはき違えた真琴はなぜかふりふり怒っているが、とりあえず真琴のくせ毛がひびくてパーマをかけたようになつている頭をわしわしと撫でてやる。

見た田の割にむせらりとした触り心地で、撫でてる方も、そして見れば撫でられる方も気持ち良さそうだった。

俺の誕生日パーティー（総勢二名かつ一切の盛り上がりに欠けて雰囲気も何もあつたもんじゃなし）は真琴がケーキを完食するまで続いた。

*

「おひへこわやんつ」

俺はこれから寝ようついビッグシートの前に立つてみると、後ろから軽い衝撃を受けた。

その正体が真琴である事は余裕で予想がつく。

後ろから抱きつく甘えてくる真琴の体をしっかりと受け止めるながら、ベッドの横においてある時計を見て現在の時刻を確認する。

日付変更線間近。

「こつまこつまでハイテンションのままなんだ。」

内心嘆息しながら、用件だけは聞いておく。

「あのねあのねっ」

肩越しに飛び出してくる顔を真横に見ながら、ゆらゆら揺れる真琴の体をしつかりと支えている俺はいい兄だと思つたりする。

「ボクをオナナにしてっ」

唐突に訝しげなことを時間もタイミングもあつたもんじやない状態でほざいてくる真琴は悪い妹だと思つたりする。

ええと、それは

「じつこいつ意味かな？」

「ボクとえつみじゅっ」

……〇へ。

本日三度目の思考停止。

再起動。

天然な真琴が、何故そいら辺はしつかりとした意味合いを持つてそう言つてくるのだるつ。

自分の兄にそういうことと言つてる時点で天然が度を超えてるんだ

か、はたまたブランの域に達してるんだかは分からぬが……。

まあ常識外れだ。

「お前、えっちの意味を知ってるのか?」

「知ってるよお。えっとね、男の人と女の人がキスとかしてね、それでね、裸になつてね、体を重ねちゃつたりしてね、男の人のアレを女人のアソコに……きやーきやー！」

一人で勝手にはしゃいだ挙句、俺の肩をばしばしと痛いくらいに叩かないでほしい。

何をどうしてお前はこうなんだ？

「つてわけで、お兄ちゃんに貞操を差し上げたいと思つ次第なのですよ!」

突然口調を変えた挙句に貞操ときましたか、この恨むべき妹は。

まあ話の内容的には放つておけないことが盛りだくさんでじきをどう突つ込むべきなのかさつぱりだが、とりあえず話以外で突つ込むべきところが一つあるので、そこから攻めておく。

「お前、服着てないな？」

「うん」

だらうなあ……。

通りで背中にぽちりとした突起物的存在を感じ取れたわけだよなあ……。

「この状況で興奮しないのは男としてどうかと思つたりもするのだが、そこは相手が妹であるいつかをフル活用して理性で歯止めを利かせている。

俺、超頑張ってね？

「何で裸なんだ？」

「そりゃあね、本番をするから準備しついでと思つてつ」

あらあら。

大変準備が宜しいことで。

なんでいつも変な所に気が回つたりするのだろうか。

誰に似た？

親父？

お袋？

まあどうでもいいが。

ええと、どうしたものか。

切に悩む。

一端の男としてここは快く真琴の素晴らしき提案をのみルパンダイブで襲い掛かるべきか。

はたまた一端の常識人として妹の貞操を守り、俺の理性を貫くべきか。

いや、本当は悩んでる時点では常識人として逸脱してるとな。

あー……じやあこいつよつ。

「あのな、真琴

俺の肩に頸をのせてくる真琴の頭に手を置きながら囁く。

時折幸せそうな顔で俺の頬に頬を擦り付けてくる姿を見て、嬉しそうに頬を緩めた真琴を見て、背中に感じるぽちっとしたものを想像して、俺の決心が緩みかけたのは生涯の秘密だ。

墓まで持つてこいつと思つ。

「男といつのは、確かに裸で興奮する。だけどな、本当の男つていうのは女の服を脱がすことで興奮するんだぜ?」

「あん日本全国の健全なる本当の男子諸君。

「 なんなの？」

くつりとした可愛い瞳で俺を見つめる。

「 ああそうだ」

完全に嘘とこりわけではないが、本当の男の全員が全員脱がすことによって興奮を得るのかどうかについて知らない。

が、とつあえず頷ことく。

そなんだあという文字をきらきらと浮かばせた瞳で見つめてくる真琴の目を見て、俺の決心がまたもぐらぐらと、父親に買つてもうつた自転車に早く乗りたいあまり買った当口に自転車練習なんて始めた子供の運転する自転車のよつべ、ひびきと揺りこだ。

なんの比喩だか知らんが。

まあ結局あれだ。

俺が好きなんだから他言を気にする必要なんてないんだ。

文句は受け付けねえ。

俺理論最高。

もうこりとだ。

それと、どうあっても靴下を脱がすことはタブー。

お兄さんとの約束だゾ

「俺も本当の男の一人だ。だからえつちをするのであれば、きちんと服を脱がすことから始めなくちゃ『気が済まないんだ』

ほほほと、もうその瞳からは俺の理性を丸ごと喰らいくすかのよつな、悪魔のきらきら光線が降り注がれているが、まあざりざり言つことは全部言ったので、俺の世界最高を誇る理性に感謝しておぐ。

びついつ観点で世界最高なのは俺自身知る由もない。

「じゃあ、ボク服着てくる~」

ぴょこんと俺の背中から降りた真琴は、そのままスタッタと俺の部屋から出て行く。

もひるんこれは背中に感じていた真琴の体重がなくなつたのと、足音、ドアの閉まる音を聞いて判断したことであつて、決して振り向いて初々しい真琴の柔肌を見てなどしているわけがない。

うふ。

頭に焼きつくようにして残つた肌色の残像の余韻に浸つてゐる場合でないと気が付くと、俺は急いでドアに駆け寄り、そして鍵をかけた。

そう、これが俺の目的。

いや裸を見ることでなくして。

恐らく、といつより確率的には九割の確率で、口で「ダメだ」と言つてもしつこく食い下がつてくるだらうことは見えみえなので、いつしてテキトーな理屈を捏ねて部屋から追い出し、鍵を閉める作戦にしたのだ。

まあ理屈というか本音というか。

もつじょりくしたら真琴の

「ひどこよお兄ちゃん~っ!」

といつ悲痛な声が聞こえてくる」と間違いなしだが、そこで欲望じやなくて情に流されてドアを開けてしまつたら最後、人との道から大きく逸れることは、より間違いない。

ここはしつかつと明日に備えて寝るべきだらう。

うん。

元々するべやうじだつたし。

もう思いこ、俺は床につく。

干した布団とこぼではないが、それでも畳のうかご窓から差し込む日光で温められたのだろう。

いつも以上にふかふかのベットがじわあと俺の疲れを取ってくれる。

もう休もう。

もう休もう。

明日も、無事に真琴の直操を魔の手（主に俺）から守れるようになりたい

「お兄ちゃん？」

「うおつー...?」

な、ななな、なんで真琴が俺のベットに入つて.....！

「鍵閉めるのなんてするこよ。もう、一々ピッキングしなくちゃいけなくて面倒なんだからあ

いやいや、自分の兄の部屋にピッキングしてまで入り込むとするなよ。

しかも気が付いた時には、既にベットの中に入り、後ろから抱きついてきている状態。

超密着。

どちらの汗とも知れぬそれが、ぬらりと垂れた。

「お兄ちゃん……ボクの初めてをあげる。優しくしてね？」

……人捨てちゃダメですか？

いやいやいやいや。

落ち着け。

ひたすらに落ち着けよ、俺。

クールになるんだ。

クールにならざるを得ないんだ、俺！

ここで人を捨てたら今までの十八年間、もうもうにパーだ。

一時の感情に流されるな、といつ言葉を聞いたことがあるけれど、まさに今がそれ。

流されたら終わり。

分かるか、俺。

しつかりしろ、俺。

負けるな、俺。

耐えろ、俺。

「ねえ、まだあ？」

真琴らしさからぬ色っぽい声色が、じわあと頭の中に染み渡つてい
く。

我慢……我慢……。

理性を保つんだ……！

嗚呼……。

背中に感じる柔らかい肌の感触。

温もり。

肩甲骨の辺りに感じる一つの突起は、やはり真琴のあれなのだろ
う。

小ぶりの胸が伝わっていく。

柔らかすぎる真琴のももが足に絡みついてくる。

薄桃色に染まつていく意識

(つだあ！ 良い男良い男！)

頭をがりがりかきむしり、脳内に良い男を想像する。

背中に妹なんていない！

抱きついてなんかない！

頭にあるのは阿部さん！

うほつ、良い男！

アツー！

だからこんな気持ちになってるのなんて嘘ー！

ありえない！

ありえないんだあつ！

*

結局、真琴の体を背中に感じること一小時間。

その興奮を冷ますのに小一時間かかって、俺の寝不足は確実なものとなつた。

……宿題の存在に気が付いたのは、朝、真琴がいつも通りに作ってくれた飯を食べてからのことである。

*

さて、ここまでで俺は筆を置いておこう。

分かつていただけたであろうつか。

これが我が妹である真琴。

その危険性である。

これを読んだ畠ちゃんも、是非とも甘えん坊な妹には氣をつけめらいたい。

もし不安ならば俺の方から「糞味噌テクニック」を貸し出ししてあげよ。ひ。

あれはいいぞ。

ノンケなら萎える。

そして笑える。

先に述べた実績を見れば、その効能は分かつていただけることだろうと思う。

さあ、甘えん坊の妹を持つ諸兄らは今すぐ俺に連絡を！

まあそんな特異な妹、いるかどうかは一切合切知らんが。

「」の授業の後、国語の先生に「」ひつひつ酷く叱られたのは言ひまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2178m/>

我が妹の危険性レポート

2011年1月13日09時33分発行